

十一

山里の^{オボロ}朧に乗じてそぞろ歩く。観海寺の石段を登りながら^{アオギ カソウ シュンセイ}仰数春星一二三と云う句を得た。余は別に和尚に逢う用事もない。逢うて雑話をする気もない。偶然と宿を出でて足の向くところに任せてぶらぶらするうち、ついこの石礎の下に出た。

しばらく^{クンシュ サンモンニ イルヲユルサズ}不許葷酒入山門と云う石を撫でて立っていたが、急にうれしくなって、登り出したのである。 ※不許葷酒入山門＝肉や生臭い野菜(葷)を食べたり、酒を飲んだものは、修行の場に相応しくないので立ち入りを禁ずるという意味

トリストラム・シャンデーと云う書物のなかに、この書物ほど神の御覚召に^{オボシメシ カノ}叶うた書き方はないとある。最初の一句はともかくも^{ジリキ ツツ}自力で綴る。 ※トリストラム・シャンデー＝イギリスの小説家ローレンス・スターンが書いた未完の小説。全9巻、1759年から1767年にかけて逐次出版。

あとはひたすらに神を念じて、筆の動くに任せる。何をかくか自分には無論見当がつかぬ。かく者は自己であるが、かく事は神の事である。したがって責任は著者にはないそうだ。余が散歩もまたこの流儀を汲んだ、無責任の散歩である。ただ神を頼まぬだけが一層の無責任である。スターンは自分の責任を免れると同時にこれを在天の神に^カ嫁した。引き受けてくれる神を持たぬ余はついにこれを^{ドブ}泥溝の中に^ス棄てた。

石段を登るにも骨を折っては登らない。骨が折れるくらいなら、すぐ引き返す。一段登って^{タタズ}佇むとき何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然^{モクネン}として、吾影を見る。角石に^{カクイシ}遮られて^{サエギ}三段に切れているのは妙だ。妙だからまた

登る。仰いで天を望む。寝ぼけた奥から、小さい星がしきりに瞬^{マバタ}きをする。句になると思って、また登る。かくして、余はとうとう、上まで登り詰めた。

石段の上で思い出す。昔し鎌倉へ遊びに行つて、いわゆる五山^{ゴサン}なるものを、ぐるぐる尋ねて廻つた時、たしか円覚寺^{エンガクジ}の塔頭^{タツチュウ}であつたらう、やはりこんな風に石段をのそりのそりと登つて行くと、門内から、黄^キな法衣^{コロモ}を着た、頭の鉢^{ハチ}の開いた坊主が出て来た。余は上^{ノボ}る、坊主は下^{クダ}る。すれ違つた時、坊主が鋭^{オイデ}どい声でどこへ御出なされると問うた。余はただ境内を拝見にと答えて、同時に足を停^トめたら、坊主は直^{タダ}ちに、何もありませんぞと言ひ捨てて、すたすた下りて行つた。あまり洒落^{シヤラク}だから、余は少^{セン}しく先を越された気味で、段上に立つて、坊主を見送ると、坊主は、かの鉢の開いた頭を、振り立て振り立て、ついに姿を杉の木の中に隠した。その間^{アイダ}かつて一度も振り返つた事はない。なるほど禅僧は面白い。きびきびしているなど、のっそり山門^{ハ イ}を這入つて、見ると、広い庫裏^{クリ}も本堂も、がらんとして、人影はまるでない。※庫裡＝僧侶の居住部屋
余はその時に心からうれしく感じた。世の中にこんな洒落^{シヤラク}な人があつて、こんな洒落に、人を取り扱つてくれたかと思うと、何となく気分が晴^{セイセイ}々した。禅^{セン}を心得ていたからと云う訳ではない。禅のぜの字もいまだに知らぬ。ただあの鉢の開いた坊主^{シヨサ}の所作が気に入つたのである。

世の中はしつこい、毒々しい、こせこせした、その上ずうずうしい、いやな奴^{ウズマ}で埋つている。元来何しに世の中へ面^{ツラ}を曝^{サラ}しているんだか、解^ゲしかねる奴さえいる。しかもそんな面に限つて大きいものだ。浮世の風にあたる面積の多いのもつて、さも名誉のごとく心得ている。五年も十年も人の臀^{シリ}に探偵をつけて、人のひる屁の勘定をし

て、それが人世だと思ってる。そうして人の前へ出て来て、御前は屁をいくつ、ひった、いくつ、ひったと頼みもせぬ事を教える。前へ出て云うなら、それも参考にして、やらんでもないが、後ろの方から、御前は屁をいくつ、ひった、いくつ、ひったと云う。うるさいと云えばなおなお云う。よせと云えばますます云う。分ったと云っても、屁をいくつ、ひった、ひったと云う。そうしてそれが処世の方針だと云う。方針は人々勝手である。ただひったひったと云わずに黙って方針を立てるがいい。人の邪魔になる方針は差し控えるのが礼儀だ。邪魔にならなければ方針が立たぬと云うなら、こっちも屁をひるのをもって、こっちの方針とするばかりだ。そうなったら日本も運の尽きだろう。

こうやって、美しい春の夜に、何らの方針も立てずに、あるいてるのは実際高尚だ。興来れば興来るをもって方針とする。興去れば興去るをもって方針とする。句を得れば、得たところに方針が立つ。得なければ、得ないところに方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。これが真正の方針である。屁を勘定するのは人身攻撃の方針で、屁をひるのは正当防禦の方針で、こうやって観海寺の石段を登るのは随縁放曠の方針である。 ※随縁放曠＝何事も縁にまかせて自由に振る舞い、物事にこだわらないこと。

仰数春星一二三の句を得て、石磴を登りつくしたる時、臙にひかる春の海が帯のごとくに見えた。山門に入る。絶句は纏める気にならなくなった。即座にやめにする方針を立てる。

石を齧んで庫裡に通ずる一筋道の右側は、岡つつじの生垣で、垣の向は墓場である。左は本堂だ。屋根瓦が高い所で、幽かに光る。数万の甍に、数万の月が落ちたよ

うだと見^{ミア}上る。どこやらで鳩の音がしきりにする。棟^{ムネ}の下にでも住んでいるらしい。

気のせい^{ヒサン}か、廂のあたりに白いものが、点々見える。糞かも知れぬ。

雨垂^{アマダ}れ落ちの所に、妙な影が一行に並んでいる。木とも見えぬ、草では無論ない。

感じから云うと岩佐又兵衛^{イワサマタベエ}のかいた、鬼^{オニ}の念仏^{ネンブツ}が、念仏をやめて、踊りを踊っている

姿である。^{イワサマタベエ}
※岩佐又兵衛＝俵屋宗達と並ぶ江戸初期を代表する大和絵師

本堂の端^{ハジ}から端まで、一行に行儀よく並んで躍^{オド}っている。その影がまた本堂の端から

端まで一行に行儀よく並んで躍^{オボロヨ}っている。朧夜にそそのかされて、鉦^{カネ}も撞木^{シュモク}も、奉加帳^{ホウガテヨウ}

も打ちすてて、誘い合せるや否やこの山寺へ踊りに来たのだらう。

^{カネ シュモク ホウガテヨウ}
※鉦も撞木も、奉加帳も＝鐘も鐘を突く棒も、寄進帳も

近寄って見ると大きな霸王樹^{サボテン}である。高さは七八尺もあろう、糸瓜^{ヘチマ}ほどな青い^{キュウリ}黄瓜を、

杓子^{シャモジ}のように^オ押しひしゃげて、柄^エの方を下に、上へ上へと継ぎ合せたように見える。

あの杓子^{ツナ}がいくつ^{ツナ}継がったら、おしまいになるのか分らない。今夜のうちにも廂を突

き破って、屋根瓦の上まで出そうだ。あの杓子が出来る時には、何でも不意に、どこ

からか出て来て、ぴしゃりと飛びつくに違いない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、

その小杓子が長い年月のうち^{ツナ}にだんだん大きくなるようには思われ^{ツナ}ない。杓子と杓子

の連続^{トツピ}がいかに突飛^キである。こんな滑稽な樹はたんとあるまい。しかも澄ましたも

のだ。いかなるこれ^{ツナ}仏と問われて、庭前^{テイゼン}の柏樹子^{ハクジュシ}と答えた僧があるよしだが、もし同

様の問に接した場合には、余は一も二もなく、月下^{ゲツカ}の霸王樹^{ハオウジュ}と^{コタ}応えるであらう。

^{テイゼン ハクジュシ}
※庭前の柏樹子＝一人の僧が「禪」とは何か、「仏」とは、「悟り」とは何かと問うと、これに対して、趙州和尚

が「庭前の柏樹子」と^{ハオウジュ}応えた禪問答。 ※霸王樹＝サボテン

少時、晁補之と云う人の記行文を読んで、いまだに暗誦している句がある。「時に九月天高く露清く、山空しく、月明かに、仰いで星斗を視れば皆光大、たまたま人の上にあるがごとし、窓間の竹数十竿、相摩戛して声切々やまず。竹間の梅棕森然として鬼魅の離立笑髻の状のごとし。二三子相顧み、魄動いて寝るを得ず。遅明皆去る」

※晁補之＝北宋時代の中国の文章家。「蘇門四学士」と称された。

※相摩戛して＝互いにこすれ合い、高い音がして ※梅棕＝梅やシュロの木 ※鬼魅の離立笑髻＝鬼や化

け物の逆立つ乱れた髪 ※二三子相顧み、魄動いて寝るを得ず＝弟子たちは互いに振り返り、肉体を司る

陰の靈気により眠ることができない ※遅明＝夜がまさに明けようとする頃

とまた口の内で繰り返して見て、思わず笑った。この霸王樹も時と場合によれば、余の魄を動かして、見るや否や山を追い下げたであろう。刺に手を触れて見ると、いらいらと指をさす。

石甃を行き尽くして左へ折れると庫裏へ出る。庫裏の前に大きな木蓮がある。ほとんど一と抱もある。高さは庫裏の屋根を抜いている。見上げると頭の上は枝である。枝の上も、また枝である。そうして枝の重なり合った上が月である。普通、枝がああ重なると、下から空は見えぬ。花があればなお見えぬ。木蓮の枝はいくら重なっても、枝と枝の間はほがらかに隙いている。木蓮は樹下に立つ人の眼を乱すほどの細い枝をいたずらには張らぬ。花さえ明かである。この遙かなる下から見上げても一輪の花は、はっきりと一輪に見える。その一輪がどこまで簇がって、どこまで咲いているかわらぬ。それにもかかわらず一輪はついに一輪で、一輪と一輪の間から、薄青い空が判然と望まれる。花の色は無論純白ではない。いたずらに白いのは寒過ぎる。専らに白い

のは、ことさらに人の眼を奪う巧みが見える。木蓮の色はそれではない。極度の白きをわざと避けて、あたたかみのある淡黄に、奥床しくも自らを卑下している。余は石甃の上に立って、このおとなしい花が累々とどこまでも空裏に蔓る様を見上げて、しばらく茫然としていた。眼に落つるのは花ばかりである。葉は一枚もない。

木蓮の花ばかりなる空を瞻る

と云う句を得た。どこやらで、鳩がやさしく鳴き合っている。

庫裏に入る。庫裏は明け放してある。盗人はおらぬ国と見える。狗はもとより吠えぬ。

「御免」

と訪問れる。森として返事がない。

「頼む」

と案内を乞う。鳩の声がくうくうと聞える。

「頼みまああす」と大きな声を出す。

「おおおおおお」と遙かの向で答えたものがある。人の家を訪うて、こんな返事を聞かされた事は決してない。やがて足音が廊下へ響くと、紙燭の影が、衝立の向側にさした。小坊主がひよこりとあらわれる。了念であった。

「和尚さんはおいでかい」

「おられる。何しにござった」

「温泉にいる画工が来たと、取次でおくれ」

「画工さんか。それじゃ御上り」

「断わらないでもいいのかい」

「よろしかろ」

余は下駄を脱いで上がる。

「行儀がわるい画工さんじゃな」

「なぜ」

「下駄を、よう御揃え^{オソロ}なさい。そらここを御覧」と紙燭を差しつける。黒い柱の真中に、土間から五尺ばかりの高さを見計^{ミハカラ}って、半紙を四つ切りにした上へ、何か認^{シタタ}めてある。

「そおら。読めたろ。脚下^{キヤツカ}を見よ、と書いてあるが」

「なるほど」と余は自分の下駄を丁寧に揃える。

和尚^{ヘヤ}の室は廊下を鍵の手に曲って、本堂の横手にある。障子を^{ウヤウヤ}恭しくあけて、恭しく敷居越しにつくばった了念が、

「あのう、志保田から、画工さんが来られました」と云う。はなはだ恐縮^{テイ}の体である。余はちょっとおかしくなった。

「そうか、これへ」

余は了念と入れ代る。室がすこぶる狭い。中に囲炉裏を切って、鉄瓶が鳴る。和尚は向側^{シヨケン}に書見をしていた。

「さあこれへ」と眼鏡をはずして、書物を^{カタワラ}傍へおしやる。

「了念。りょううねええん」

「ははははい」

「座布団を上げんか」

「はははははい」と了念は遠くで、長い返事をする。

「よう、来られた。さぞ退屈だろ」

「あまり月がいいから、ぶらぶら来ました」

「いい月じゃな」と障子をあける。飛び石が二つ、松一本のほかには何もない、^{ヒラニフ}平庭の向うは、すぐ懸崖^{ケンガイ}と見えて、眼の下に朧夜^{オボロヨ}の海がたちまちに開ける。急に気が大きくなったような心持である。漁火^{イサリビ}がここ、かしこに、ちらついて、遙かの末は空に入っ
て、星に化^ハけるつもりだろう。

「これはいい景色。和尚さん、障子をしめているのはもったいないじゃありませんか」

「そうよ。しかし毎晩見ているからな」

「何晩見てもいいですよ、この景色は。私なら寝ずに見ています」

「ハハハハ。もっともあなたは画工^{エカキ}だから、わしとは少し違うて」

「和尚さんだって、うつくしいと思ってるうちは画工でさあ」

「なるほどそれもそうじゃろ。わしも達磨^{ダルマ}の画^エぐらいはこれで、かくがの。そら、ここに掛けてある、この軸は先代がかかれたのじゃが、なかなかようかいとる」

なるほど達磨の画が小さい床^{トコ}に掛っている。しかし画としてはすこぶるまずいものだ。ただ俗気^{ソッキ}がない。拙^{セツ}を蔽^{オオ}おうと力^{ツト}めているところが一つもない。無邪気な画だ。
この先代もやはりこの画のような構わない人であったんだろう。

「無邪気な画ですね」

「わしらのかく画はそれで沢山^{キシヨウ}じゃ。氣象^{キシヨウ}さえあらわれておれば……」

「上手で俗気があるのより、いいです」

「ははははまあ、それでも、^ホ賞めて置いてもらおう。時に近頃は画工にも博士があるかの」

「画工の博士はありませんよ」

「あ、そうか。この間、何でも博士に一人^オ逢うた」

「へええ」

「博士と云うとえらいものじゃろな」

「ええ。えらいんでしょう」

「画工にも博士がありそうなものじゃがな。なぜ無いだろう」

「そういえば、和尚さんの方にも博士がなけりゃならないでしょう」

「ハハハハまあ、そんなものかな。——何とか云う人じゃったて、この間逢うた人は——どこぞに名刺があるはずだが……」

「どこで御逢いです、東京ですか」

「いやここで、東京へは、も二十年も出ん。近頃は電車とか云うものが出来たそうじやが、ちょっと乗って見たいような気がする」

「つまらんものですよ。やかましくって」

「そうかな。^{シヨッケン}蜀犬日に吠え、^ホ呉牛月に喘ぐと云うから、わしのような田舎者は、かえって困るかも知れんてのう」

※蜀は日照時間が少く、犬は太陽が見えると怪しんで吠える。過度におびえること。

※呉牛は暑さをいやがるあまり、月を見ても太陽と見誤って喘ぐ。取り越し苦勞をするたとえ。

「困りゃしませんかね。つまらんですよ」

「そうかな」

鉄瓶の口から煙が^{サカン}盛に出る。和尚は茶箆筒から茶器を取り出して、茶を^ツ注いでくれる。

「番茶を一つ^{オアガ}御上り。志保田の隠居さんのような^{ウマ}甘い茶じゃない」

「いえ結構です」

「あなたは、そうやって、方々あるくように見受けるがやはり^エ画をかくためかの」

「ええ。道具だけは持ってあるきますが、画はかかないでも構わないんです」

「はあ、それじゃ遊び半分かの」

「そうですね。そう云っても善いでしょう。屁の勘定をされるのが、いやですからね」

さすがの禅僧も、この語だけは解しかねたと見える。

「屁の勘定た何かな」

「東京に永くいると屁の勘定をされますよ」

「どうして」

「ハハハハ勘定だけならいいですが。人の屁を分析して、^{シリ}臀の穴が三角だの、四角だのって余計な事をやりますよ」

「はあ、やはり衛生の方かな」

「衛生じゃありません。探偵の方です」

「探偵？ なるほど、それじゃ警察じゃの。いったい警察の、巡査のて、何の役に立つかの。なけりゃならんかいの」

「そうですね、^{エカキ}画工には入りませんね」

「わしにも入らんがな。わしはまだ巡査の厄介になった事がない」

「そうでしょう」

「しかし、いくら警察が屁の勘定をしたてて、構わんがな。^ス澄ましていたら。自分にわるい事がなけりゃ、なんぼ警察じゃて、どうもなるまいがな」

「屁くらいで、どうかされちゃたまりません」

「わしが小坊主のとき、先代がよう云われた。人間は日本橋の真中に^{ソウフ}臍腑をさらけ出して、恥ずかしくないようにしなければ修業を積んだとは云われんてな。あなたもそれまで修業をしたらよかる。旅などはせんでも済むようになる」

「画工になり澄ませば、いつでもそうなれます」

「それじゃ画工になり澄したらよかる」

「屁の勘定をされちゃ、なり切れませんよ」

「ハハハハ。それ御覧。あの、あなたの^{トマ}泊っている、志保田の御那美さんも、嫁に^イ入って帰ってきてから、どうもいろいろな事が気になってならん、ならんと云うてしまいにとうとう、わしの所へ^{ホウ}法を問いに来たじゃて。ところが近頃はだいぶ出来てきて、そら、御覧。あのような^{ワケ}訳のわかった女になったじゃて」

「へええ、どうもただの女じゃないと思いました」

「いやなかなか機鋒の鋭どい女で——わしの所へ修業に来ていた^{タイアン}泰安と云う^{ニヤクソウ}若僧も、あの女のために、ふとした事から大事を^{キュウメイ}窮明せんならん^{インネン}因縁に^{ホウチャク}逢着して——今によい

^{チシキ}智識になるようじゃ」

※^{ホウチャク}逢着＝行き当たる ※^{チシキ}智識＝仏道修行者の指導者である善知識の略称

静かな庭に、松の影が落ちる、遠くの海は、空の光りに応^{コタ}うるがごとく、応えざるがごとく、有^ウ耶^ヤ無^ム耶^ヤのうちに微^{カス}かなる、耀^{カガヤ}きを放^{イサリビ}つ。漁火は明滅す。

「あの松の影を御覧」

「奇麗ですな」

「ただ奇麗かな」

「ええ」

「奇麗な上に、風が吹いても苦しめない」

茶碗に余った渋茶を飲み干して、糸^{イトソコ}底を上に、茶^{チャタク}托へ伏せて、立ち上る。

「門まで送ってあげよう。りょううねええん。御客^{オカエリ}が御帰だぞよ」

送られて、庫裏^{クリ}を出ると、鳩がくうくうと鳴く。

「鳩ほど可愛いものはない、わしが、手をたたくと、みな飛んでくる。呼んで見よか」

月はいよいよ明るい。しんしんとして、木蓮^{モクレン}は幾^{イクダ}朶^{ウンゲ}の雲華^{クウリ}を空裏^{ササゲ}に撃^{ウツ}ている。

※朶^ダ＝花がつき垂れ下がった枝 ※雲華^{ウンゲ}＝雲のように固まって咲いている白い花

沓^{ケツリョウ}寥^{シュンヤ}たる春夜^{マナカ}の真中に、和尚ははたと掌^{タナゴコロ}を拍^ウつ。声は風^{フウチュウ}中に死^シして一羽^{ヒト}の鳩も下りぬ。 ※沓寥＝雲一つなく、晴れわたって いるさま

「下りんかいな。下りそうなものじゃが」

了念は余の顔を見て、ちょっと笑った。和尚は鳩の眼が夜でも見えると思うているらしい。気楽なものだ。

山門の所で、余は二人に別れる。見返えると、大きな丸い影と、小さな丸い影が、石盤^{インダタミ}の上に落ちて、前後して庫裏の方に消えて行く。

十二

^{キリスト}基督は最高度に芸術家の態度を具足したるものなりとは、オスカー・ワイルドの説

と記憶している。 ※オスカー・ワイルド＝1854年アイルランド生まれ 詩人、作家、劇作家。

多彩な文筆活動をしたが、男色を咎められて収監され、出獄後、失意から回復しないままに46歳で没した。

彼の文業と生きざまは、世界中に影響を及ぼし、日本に限っても、森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介、谷崎潤

一郎以降、翻訳者たちが、ワイルドを意識した。主な著書『サロメ』(1893)詩劇、『理想の夫』(1895)戯曲等

基督は知らず。観海寺の和尚のごときは、まさしくこの資格を有していると思う。趣味があると云う意味ではない。時勢に通じていると云う訳でもない。彼は画^エと云う名のほとんど下^{クダ}すべからざる達磨の幅を掛けて、ようできたなどと得意である。彼は画工^{エカキ}に博士があるものと心得ている。彼は鳩の眼を夜でも利くものと思っている。それにも関わらず、芸術家の資格があると云う。彼の心は底のない囊^{フクロ}のように行き抜けである。何にも停滞しておらん。随処に動き去り、任意に作^ナし去って、些^サの塵滓^{ジンシ}の腹部に沈澱する景色がない。もし彼の脳裏に一点の趣味^{チョウ}を貼し得たならば、彼は之^ユく所に同化して、行屎走尿^{コウシ ソウニョウ}の際にも、完全たる芸術家として存在し得るだろう。

※行屎走尿＝便所で用を足す

余のごときは、探偵に屁の数を勘定される間は、とうてい画家にはなれない。画架^{ガ カ ムカ}に向う事は出来る。小手板を握る事は出来る。しかし画工にはなれない。こうやって、名

も知らぬ山里へ来て、暮れんとする春色のなかに五尺の瘦軀^{ソウク ウズ}を埋めつくして、始めて、真の芸術家たるべき態度に吾身を置き得るのである。一たびこの境界^{キョウガイ}に入れば美の天下はわが有に帰する。尺素^{セキソ}を染めず、寸縑^{スンケン}を塗らざるも、われは第一流の大画工である。技において、ミケルアンゼロに及ばず、巧みなる事ラフハエルに譲る事ありとも、芸術家たるの人格において、古今の大家と歩武^{ホ フ ヒシ}を齊ゆうして、毫^{ゴウ}も遜^{ユズ}るところを見出し得ない。 ※尺素=絹布 ※寸縑=画布 ※歩武=足取り（武=歩の1/2）

余はこの温泉場へ来てから、まだ一枚の画もかかない。絵の具箱は酔興に、担^{カツ}いできたかの感さえある。人はあれでも画家かと嗤うかもしれぬ。いくら嗤われても、今の余は真の画家である。立派な画家である。こう云う境を得たものが、名画をかくとは限らん。しかし名画をかき得る人は必ずこの境を知らねばならん。

朝飯をすまして、一本の敷島をゆたかに吹かしたときの余の観想は以上のごとくである。日は霞^{カスミ}を離れて高く上^{ノボ}っている。障子をあけて、後ろの山を眺めたら、蒼^{アオ}い樹^キが非常にすき通って、例になく鮮やかに見えた。

余は常に空気と、物象と、彩色の関係を宇宙^{ヨノナカ}でもっとも興味ある研究の一と考えている。色を主にして空気を出すか、物を主にして、空気をかくか。または空気を主にしてそのうちに色と物とを織り出すか。画は少しの気合一つでいろいろな調子が出る。この調子は画家自身の嗜好で異なってくる。それは無論であるが、時と場所とで、自ずから制限されるのもまた当前である。英国人のかいた山水^{サンスイ}に明るいものは一つもない。明るい画が嫌^{キライ}なのかも知れぬが、よし好きであっても、あの空気では、どうする事も出来ない。同じ英人でもゲーダルなどは色の調子がまるで違う。違うはずである。

彼は英人でありながら、かつて英国の景色ケイシヨクをかいた事がない。彼の画題は彼の郷土にはない。彼の本国に比すると、空気の透明の度の非常に勝マサっている、埃及エジプトまたは波斯ペルシヤヘン辺の光景のみを扱エラんでいる。したがって彼のかいた画を、始めて見ると誰も驚ろく。英人にもこんな明かな色を出すものがあるかと疑うくらい判然ハッキリ出来上っている。

個人の嗜好はどうする事も出来ん。しかし日本の山水を描くのが主意であるならば、吾々フレフレもまた日本固有の空気と色を出さなければならん。いくら仏蘭西フランスの絵がうまいと云って、その色をそのままに写して、これが日本の景色ケイシヨクだとは云われぬ。やはり面マあたり自然に接して、朝な夕なに雲容煙態ウンヨウエンタイを研究したあげく、あの色こそと思ったとき、すぐ三脚几を担いで飛び出さなければならん。色は刹那セツナに移る。一たび機シツを失すれば、同じ色は容易に眼には落ちぬ。余が今見上げた山の端ハには、滅多にこの辺で見事イの出来ないほどな好い色が充ちている。せつかく来て、あれを逃すのは惜しいものだ。ちょっと写してきよう。

襖フスマをあけて、椽側エンガワへ出ると、向う二階の障子ショウジに身を倚モたして、那美さんが立っている。顛アゴを襟エリのなかへ埋めて、横顔ウズだけしか見えぬ。余が挨拶をしようと思う途端に、女は、左の手を落としたまま、右の手を風のごとく動かした。閃ヒラメくは稲妻か、二折れ三折フタオ ミオれ胸のあたりを、するりと走るや否や、かちりと音がして、閃めきはすぐ消えた。女の左り手には九寸五分の白鞆シラサヤがある。姿はたちまち障子の影に隠れた。余は朝っぴらから歌舞伎座ノゾを覗いた気で宿を出る。

門を出て、左へ切れると、すぐ岨道ソバミチつづきの、爪上りツマアガになる。鶯ウグイスが所々で鳴く。左り手がなだらかな谷へ落ちて、蜜柑ミカンが一面に植えてある。右には高からぬ岡が二つ

ほど並んで、ここにもあるは蜜柑のみと思われる。何年前か一度この地に来た。指を折るのも面倒だ。何でも寒い師走の頃であった。その時蜜柑山に蜜柑がべた生りに生る景色を始めて見た。蜜柑取りに一枝売ってくれと云ったら、幾顆でも上げますよ、持っていらっしやいと答えて、樹の上で妙な節の唄をうたい出した。東京では蜜柑の皮でさえ薬種屋へ買いに行かねばならぬのにも思った。夜になると、しきりに銃の音がする。何だと聞いたら、獵師が鴨をとるんだと教えてくれた。その時は那美さんの、なの字も知らずに済んだ。

あの女を役者にしたら、立派な女形が出来る。普通の役者は、舞台へ出ると、よそ行きの芸をする。あの女は家のなかで、常住芝居をしている。しかも芝居をしているとは気がつかん。自然天然に芝居をしている。あんなのを美的生活とでも云うのだろう。あの女の御蔭で画の修業がだいふ出来た。

あの女の所作を芝居と見なければ、薄気味がわるくて一日もいたたまれん。義理とか人情とか云う、尋常の道具立を背景にして、普通の小説家のような観察点からあの女を研究したら、刺激が強過ぎて、すぐいやになる。現実世界に在って、余とあの女の間には纏綿した一種の関係が成り立ったとするならば、余の苦痛は恐らく言語に絶するだろう。 ※纏綿した＝複雑に入り組んだ

余のこのたびの旅行は俗情を離れて、あくまで画工になり切るのが主意であるから、眼に入るものはことごとく画として見なければならん。能、芝居、もしくは詩中の人物としてのみ観察しなければならん。この覚悟の眼鏡から、あの女を覗いて見ると、

あの女は、今まで見た女のうちでもっともうつくしい所作をする。自分でうつくしい芸をして見せると云う気がないだけに役者の所作よりもなおうつくしい。

こんな^{カンガエ}考をもつ余を、誤解してはならん。社会の公民として不適當だなどと評してはもっとも^{フトド}不届きである。善は行い難い、徳は^{ホド}施こしにくい、節操は守り安からぬ、義のために命を捨てるのは惜しい。これらをあえてするのは何人^{ナンビト}に取っても苦痛である。その苦痛^{オカ}を冒すためには、苦痛に打ち勝つだけの愉快がどこかに^{ヒソ}潜んでおらねばならん。画と云うも、詩と云うも、あるは芝居と云うも、この^{ヒサン}悲酸のうちに^{コモ}籠る快感の別号に過ぎん。この趣きを解し得て、始めて^{ゴジン}吾人の所作は壮烈にもなる、閑雅にもなる、すべての困苦に打ち勝って、胸中の一点の無上趣味を満足せしめたくなる。肉体の苦しみを度外に置いて、物質上の不便を物とも思わず、^{ショウジン}勇猛精進の心を駆って、人道のために、^{テイカク}鼎鑊^コに煮らるるを面白く思う。

※勇猛精進＝勇敢に、精力的に物事を行うこと ※鼎鑊に煮らるる＝釜煎りの刑に処される

もし人情なる^{セマ}狭き立脚地に立って、芸術の定義を下し得るとすれば、芸術は、われら教育ある士人の胸裏に潜んで、邪を避け正に^ツ就き、曲を^{シリソ}斥け直にくみし、弱を^{タス}扶け強を^{クジ}挫かねば、どうしても^タ堪えられぬと云う一念の結晶して、^{サン}燦として^{ハクジン}白日を射返すものである。

芝居気があると人の行為を笑う事がある。うつくしき趣味を^{ツラス}貫かんがために、不必要なる犠牲をあえてするの人情に遠きを^{ワラ}嗤うのである。自然にうつくしき性格を発揮するの機会を待たずして、無理矢理に自己の趣味観を^{テラ}銜うの愚を笑うのである。真に^{コチュウ}個中の消息を解し得たるものの嗤うはその意を得ている。趣味の何物たるをも心得ぬ

ゲスゲロウ 下司下郎の、わが卑^{イヤ}しき心根に比較して他を賤^{イヤ}しむに至っては許しがたい。昔し巖頭
の吟^コを遺して、五十丈の飛瀑を直下して急湍^{キウタン}に赴^{オモム}いた青年がある。

※吟＝詩歌を歌う ※五十丈の飛瀑＝高さ 150mの滝 急湍＝流れの速い瀬

余の視るところにては、彼の青年は美の一字のために、捨つべからざる命を捨てたる
ものと思う。死そのものは洵^{マコト}に壮烈である、ただその死を促^{ウナ}がすの動機に至っては解
しがたい。されども死そのものの壮烈をだに体し得ざるものが、いかにして藤村子^{フジムラシ}
所作^{ショサ}を嗤^{ワラ}い得べき。

※藤村子＝藤村操＝旧制一高の学生。厭世観に基づく「巖頭之感」を書き残して、華巖の滝で自殺

彼らは壮烈の最後を遂^トぐるの情趣^{アジフ}を味^{ユエ}い得ざるが故に、たとい正当の事情のもとにも、
どうてい壮烈の最後を遂げ得べからざる制限ある点において、藤村子よりは人格とし
て劣等であるから、嗤う権利がないものと余は主張する。

余は画工^{エカキ}である。画工であればこそ趣味専門の男として、たとい人情世界^{ダザイ}に墮在す
るも、東西両隣りの没風流漢^{ボツフウリュウカン}よりも高尚である。※没風流漢＝風流を解さない男
社会の一員として優に他を教育すべき地位に立っている。詩なきもの、画なきもの、
芸術のたしみななきものよりは、美しくしき所作が出来る。人情世界にあって、美しく
しき所作は正である、義である、直である。正と義と直を行為の上において示すものは
天下の公民の模範である。

しばらく人情界を離れたる余は、少なくともこの旅中^{リョチュウ}に人情界に帰る必要はない。
あってはせつかくの旅が無駄になる。人情世界から、じゃりじゃりする砂をふるって、
底にあまる、うつくしい金^{キン}のみを眺めて暮さなければならぬ。余自^{ミズカ}らも社会の一員を

もって任じてはおらぬ。純粹なる専門画家として、己れさえ、纏綿たる利害の累索を絶って、優に画布裏に往来している。いわんや山をや水をや他人をや。那美さんの行為動作といえどもただそのままの姿と見るよりほかに致し方がない。

三丁ほど上ると、向うに白壁の一構が見える。蜜柑のなかの住居だと思う。道は間もなく二筋に切れる。白壁を横に見て左りへ折れる時、振り返ったら、下から赤い腰巻をした娘が上ってくる。腰巻がしだいに尽きて、下から茶色の脛が出る。

※脛=すね

脛が出切ったら、藁草履になって、その藁草履がだんだん動いて来る。頭の上に山桜が落ちかかる。背中には光る海を負っている。

岨道を登り切ると、山の出鼻の平な所へ出た。北側は翠りを畳む春の峰で、今朝椽から仰いだあたりかも知れない。南側には焼野とも云うべき地勢が幅半丁ほど広がって、末は崩れた崖となる。崖の下は今過ぎた蜜柑山で、村を跨いで向を見れば、眼に入るものは言わずも知れた青海である。

路は幾筋もあるが、合うては別れ、別れては合うから、どれが本筋とも認められぬ。どれも路である代りに、どれも路でない。草のなかに、黒赤い地が、見えたり隠れたりして、どの筋につながるか見分のつかぬところに変化があつて面白い。

どこへ腰を据えたものかと、草のなかを遠近と徘徊する。椽から見たときは画になると思った景色も、いざとなると存外纏まらない。色もしだいに変わってくる。草原をのそつこうちに、いつしか描く気がなくなった。描かぬとすれば、地位は構わん、ど

こへでも坐った所がわが住居^{スマイ}である。染み込んだ春の日が、深く草の根に籠^{コモ}って、どつかと尻^{オロ}を卸すと、眼に入らぬ陽炎^{カゲロウ}を踏み潰したような心持ちがする。

海は足の下に光る。遮^{ヒトヒラ}ぎる雲の一片さえ持たぬ春の日影は、普^{アマ}ねく水の上を照らして、いつの間にかほとぼりは波の底まで浸^シみ渡ったと思わるるほど暖かに見える。色は一刷毛^{ヒトハケ}の紺青^{コンジョウ}を平らに流したる所々に、しろかねの細鱗^{サイリン}を畳^{コマ}んで濃やかに動いている。春の日は限り無^{アメ}き天^{シタ}が下を照らして、天が下は限りなき水^{タタ}を湛^{タタ}えたる間には、白き帆^{ツメ}が小指の爪^{ツメ}ほどに見えるのみである。しかもその帆は全く動かない。往昔^{ソノカミ}入貢^{ニユウコウ}の高麗船^{コマフネ}が遠くから渡ってくる時には、あんなに見えたであろう。

※往昔＝遠い昔 ※入貢＝外国からの貢物を運ぶ

そのほかは大^{ダイセン}千^{セン}世界^{キョウ}を極めて、照らす日の世、照らさるる海の世のみである。

※大千世界＝仏教の世界観による広大無辺の世界

ごろりと寝る。帽子^{ヒタイ}が額^{ヒタイ}をすべって、やけに阿^ア弥^ミ陀^ダとなる。所々の草を一二尺^ス抽いて、木瓜^{ボケ}の小株^ケが茂っている。余が顔はちょうどその一つの前に落ちた。木瓜は面白い花である。枝は頑固で、かつて曲った事がない。そんなら真直^{マツスグ}かと云うと、けっして真直でもない。ただ真直な短かい枝に、真直な短かい枝が、ある角度で衝突^{シヤ}して、斜に構^{ベニ}えつつ全体が出来上っている。そこへ、紅^{ベニ}だか白^{ベニ}だか要領^{ベニ}を得ぬ花^{ベニ}が安閑^{アンカン}と咲く。
柔^{ヤワラ}かい葉^{ヤワラ}さえちらちら着ける。評して見ると木瓜は花のうちで、愚かにして悟ったものであろう。世間には拙^{セツ}を守ると云う人がある。この人が来世に生れ変るときっと木瓜になる。余も木瓜になりたい。

小供のうち花の咲いた、葉のついた木瓜を切って、面白く枝振^{エダフリ}を作って、筆架^{ヒツカ}をこしらえた事がある。それへ二銭五厘の水筆^{スイヒツ}を立てかけて、白い穂が花と葉の間から、隠見^{インケン}するのを机へ載^ノせて楽んだ。その日は木瓜の筆架ばかり気にして寝た。あくる日、眼が覚^サめるや否や、飛び起きて、机の前へ行って見ると、花は萎え葉は枯れて、白い穂だけが元のごとく光っている。あんなに綺麗なものが、どうして、こう一晩のうちに、枯れるだろうと、その時は不審の念に堪えなかった。今思うとその時分の方がよほど出世間的^{シュッセケンテキ}である。 ※出世間＝世間のわずらわしさを超越する

寝^ネるや否や眼についた木瓜は二十年来の旧知己である。見詰めているとしだいに気が遠くなって、いい心持ちになる。また詩興が浮ぶ。

寝ながら考える。一句を得るごとに写生帖^{シル}に記して行く。しばらくして出来上ったようだ。始めから読み直して見る。

出門多所思。春風吹吾衣。 外へ出るといろいろなことを思う。春風がわたしの衣服に吹き付る。

芳草生車轍。廃道入霞微。 ^{カグワ}芳しい草が車の^{ワダチ}轍に生え、人の通らぬ道は春霞で霞んでいる。

停筇而矚目。万象帶晴暉。 竹の杖を止めて目を凝らせば、万物が晴れた日の輝きを帯びている。

聽黄鳥宛轉。觀落英紛霏。 ^{ウグイス}鶯のまろやかな鳴き声を聞き、花びらがひらひらと散るのを見る。

行尽平蕪遠。題詩古寺扉。 平地から遥か遠くへ行き、古寺の扉に詩を書き記す。

孤愁高雲際。大空断鴻歸。 孤独な憂愁を帯びた雲は高く、大空には仲間の元へ帰る雁がいる。

寸心何窈窕。縹緲忘是非。 自分の心がなぜ奥ゆかしくなり、はっきりせず事の善悪も忘れるのか。

三十我欲老。韶光猶依々。 三十歳になり私は老いようとし、春の光は相変わらずやわらかである。

逍遙随物化。悠然对芬菲。 歩き回り、万物の流転に従い、悠然として微かな花の香りに向き合う。

ああ出来た、出来た。これで出来た。寝ながら木瓜^{ボケミ}を観て、世の中を忘れている感じがよく出た。木瓜が出なくっても、海が出なくっても、感じさえ出ればそれで結構である。と唸りながら、喜んでいると、エヘンと云う人間の咳^{セキ}払い^{ハラ}が聞えた。こいつは驚いた。

寝^ネ返^{ガエ}りをして、声の響いた方を見ると、山の出鼻を回って、雑木^{ソウキ}の間から、一人の男があらわれた。

茶の中折れ^{カブ}を被っている。中折れの形は崩れて、傾^{ヘリ}く縁の下から眼が見える。眼の恰好はわからんが、たしかにきよろきよろときよろつくようだ。藍^{アイ}の縞^{シマ}物^{モノ}の尻^{ハシ}を端^{シヨ}折^ツつて、素足に下駄^{ヒゲ}がけの出で立ちは、何だか鑑定がつかない。野生の髯^{ヒゲ}だけで判断するとまさに野武士の価値はある。

男は岨道^{ソバミチ}を下りるかと思いのほか、曲り角からまた引き返した。もと来た路へ姿をかくすかと思うと、そうでもない。またあるき直してくる。この草原を、散歩する人のほかに、こんなに行きつ戻りつするものはないはずだ。しかしあれが散歩の姿であろうか。またあんな男がこの近辺に住んでいるとも考えられない。男は時々立ち留る。首を傾げる。または四方を見廻わす。大に考え込むようにもある。人を待ち合わせる風にも取られる。何だかわからない。

余はこの物騒な男から、ついに吾眼をはなす事ができなかった。別に恐しいでもない、また画^エにしよう^トと云う気も出ない。ただ眼をはなす事ができなかった。右から左、左りから右と、男に添うて、眼を働かせているうちに、男ははたと留った。留ると共に、またひとりの人物が、余が視界^{テンシュツ}に点出された。

二人は双方で互に認識したように、しだいに双方から近づいて来る。余が視界はだんだん縮まって、原の真中で一点の狭き間に畳まれてしまう。二人は春の山を背に、春の海を前に、ぴたりと向き合った。

男は無論例の野武士である。相手は？ 相手は女である。那美さんである。

余是那美さんの姿を見た時、すぐ今朝の短刀を連想した。もしや懐に呑んでおりはせぬかと思ったら、さすが非人情の余もただ、ひやりとした。

男女は向き合うたまま、しばらくは、同じ態度で立っている。動く景色は見えぬ。口は動かしているかも知れんが、言葉はまるで聞えぬ。男はやがて首を垂れた。女は山の方を向く。顔は余の眼に入らぬ。

山では鶯が啼く。女は鶯に耳を借して、いるとも見える。しばらくすると、男は屹と、垂れた首を挙げて、半ば踵を回らしかける。尋常の様ではない。女は颯と体を開いて、海の方へ向き直る。帯の間から頭を出しているのは懐剣らしい。男は昂然として、行きかかる。女は二歩ばかり、男の踵を縫うて進む。女は草履ばきである。男の留ったのは、呼び留められたのか。振り向く瞬間に女の右手は帯の間へ落ちた。あぶない！

するりと抜け出たのは、九寸五分かと思いのほか、財布のような包み物である。差し出した白い手の下から、長い紐がふらふらと春風に揺れる。

片足を前に、腰から上を少しそらして、差し出した、白い手頸に、紫の包。これだけの姿勢で充分画にはなろう。

紫でちょっと切れた図面が、二三寸の間隔をとって、振り返る男の体の^{タイ}こなし具合で、うまい按排につながれている。不即不離とはこの刹那の有様を形容すべき言葉と思う。女は前を引く態度で、男は^{シリ}後えに引かれた様子だ。しかもそれが実際に引いてもひかれてもおらん。両者の^{エン}縁は紫の財布の尽くる所で、ふつりと切れている。

二人の姿勢がかくのごとく^{ビョウ}美妙な調和を保っていると同時に、両者の顔と、衣服にはあくまで、対照が認められるから、画として見ると一層の興味が深い。

背のずんぐりした、色黒の、^{ヒゲ}髯づらと、くっきり締った^{ホソオモテ}細面に、襟の長い、^{ナデガタ}撫肩の、^{キャシヤ}華奢姿。ぶっきらぼうに身をひねった下駄がけの野武士と、^{フダンギ}不断着の^{メイセン}銘仙さえしなやかに着こなした上、腰から上を、おとなしく反り身に控えたる^{ヤサガタ}瘦形。 ※銘仙＝絹織物はげた茶の帽子に、^{アイジマ}藍縞の尻切り出立ちと、^{カゲロウ}陽炎さえ燃やすべき^{ビン}櫛目の通った鬢の色に、^{クロジュス}黒縞子のひかる奥から、ちらりと見せた^{オビアゲ}帯上の、なまめかしさ。すべてが^{コウガタイ}好画題である。 ※鬢＝耳際の髪 ※黒縞子＝黒色の縞子織の着物

男は手を出して財布を受け取る。引きつ引かれつ^{タカ}巧みに平均を保ちつつあった二人の位置はたちまち^{クズ}崩れる。女はもう引かぬ、男は引かりようともせぬ。心的状態が絵を構成する上に、かほどの影響を与えようとは、画家ながら、今まで気がつかなかった。

二人は左右へ分かれる。双方に気合がないから、もう画としては、支離滅裂である。雑木林の入口で男は一度振り返った。女は^{アト}後をも見ぬ。すらすらと、こちらへ^{アルイ}歩行てくる。やがて余の真正面まで来て、

「先生、先生」

と二^{フタコエ}声掛けた。これはしたり、いつ^メ目付かったろう。

「何です」

と余は木瓜^{ボケ}の上へ顔を出す。帽子は草原へ落ちた。

「何をそんな所でしていらっしゃる」

「詩を作って寝ていました」

「うそをおっしゃい。今のを御覧でしょう」

「今の？ 今の、あれですか。ええ。少々拝見しました」

「ホホホホ少々でなくても、たくさん御覧なさればいいのに」

「実のところはたくさん拝見しました」

「それ御覧なさい。まあちょっと、こっちへ出ていらっしゃい。木瓜の中から出ていらっしゃい」

余は唯々^{イイ}として木瓜の中から出て行く。 ※唯々^{イイ}として=逆らわないで他人の言うままになる

「まだ木瓜の中に御用があるんですか」

「もう無いんです。帰ろうかとも思うんです」

「それじゃごいっしょに参りましょうか」

「ええ」

余は再び唯々として、木瓜の中に退いて、帽子を被り、絵の道具を纏めて、那美さんといっしょにあるき出す。

「画を御描きになったの」

「やめました」

「ここへいらして、まだ一枚も御描きなさらないじゃありませんか」

「ええ」

「でもせっかく画をかきにいらして、ちっとも御かきなさらくっちゃ、つまりませんわね」

「なにつまってるんです」

「おやそう。なぜ？」

「なぜでも、ちゃんをつまるんです。画なんぞ描^カいたって、描かなくったって、つまるところは同じ事できあ」

「そりゃ洒落なの、ホホホ随分呑気ですねえ」

「こんな所へくるからには、呑気にでもしなくっちゃ、来た甲斐がないじゃありませんか」

「なあにどこにいても、呑気にしなくっちゃ、生きてる甲斐はありませんよ。私なんぞは、今のようなところを人に見られても恥^{ハズ}かしくも何とも思いません」

「思わんでもいいでしょう」

「そうですかね。あなたは今の男をいったい何だと御思いです」

「そうさな。どうもあまり、金持ちじゃありませんね」

「ホホホ善^ヨくあたりました。あなたは占いの名人ですよ。あの男は、貧乏して、日本にいられないからって、私に御金を貰いに来たのです」

「へえ、どこから来たのです」

「^{ジョウカ}城下から来ました」

「随分遠方から来たもんですね。それで、どこへ行くんですか」

「何でも満洲へ行くそうです」

「何しに行くんですか」

「何しに行くんですか。御金を拾いに行くんだか、死にに行くんだか、分りません」

この時余は眼をあげて、ちよと女の顔を見た。今結んだ口元には、^{カス}微かなる笑の影が消えかかりつつある。意味は解せぬ。

「あれは、わたくしの亭主です」

^{ジンライ}迅雷を^{オオ}掩らに^{イマ}違あらず、女は突然として^{ヒトタチ}一太刀浴びせかけた。余は全く^{フイウチ}不意撃を^ウ喰った。無論そんな事を聞く気はなし、女も、よもや、ここまで^{サラ}曝け出そうとは考えていなかった。

「どうです、驚ろいたでしょう」と女が云う。

「ええ、少々驚ろいた」

「今の亭主じゃありません、離縁された亭主です」

「なるほど、それで……」

「それぎりです」

「そうですか。——あの蜜柑山に立派な白壁の家がありますね。ありや、いい地位にあるが、誰の^{ウチ}家なんですか」

「あれが兄の家です。帰り路にちょっと寄って、行きましょう」

「用でもあるんですか」

「ええちつと頼まれものがあります」

「いっしょに行きましょう」

^{ソバミチ} 峠道の登り口へ出て、村へ下りずに、すぐ、右に折れて、また一丁ほどを登ると、門がある。門から玄関へかからずに、すぐ庭口へ廻る。女が無遠慮につかつか行くから、余も無遠慮につかつか行く。南向きの庭に、^{シュロ} 棕櫚が三四本あって、土塀の下はすぐ蜜柑畠である。

女はすぐ、^{エンバナ} 椽鼻へ腰をかけて、云う。

「いい景色だ。御覧なさい」

「なるほど、いいですな」

障子のうちは、静かに人の気合もせぬ。女は^{オト}音のう景色もない。ただ腰をかけて、蜜柑畠を^{ミオロ}見下して平気である。余は不思議に思った。元来何の用があるのかしら。

しまいには話もないから、両方共無言のまま蜜柑畠を見下している。午に^ゴ逼る太陽は、まともに暖かい光線を、山一面にあびせて、眼に余る蜜柑の葉は、葉裏まで、蒸し返されて^{カガ}耀やいている。やがて、裏の^{ナヤ}納屋の方で、鶏が大きな声を出して、こけこっこうと鳴く。

「おやもう。^{オヒル}御午ですね。用事を忘れていた。——^{キュウイチ}久一さん、久一さん」

女は及び腰になって、立て切った障子を、からりと開ける。内は空しき十畳敷に、狩野派の^{ソウフク}双幅が空しく春の^{トコ}床を飾っている。

「久一さん」

^{ナヤ} 納屋の方でようやく返事がする。足音が^{フスマ}襖の^{ムコウ}向でとまって、からりと、開くが早い。か、^{シラサヤ}白鞘の短刀が畳の上へ転がり出す。

「そら御^オ伯^ジ父さんの餞別だよ」

帯の間に、いつ手が這^ハ入^イったか、余は少しも知らなかった。短刀は二三度とんぼ返りを打って、静かな畳の上を、久一さんの^{アシ}足^{モト}下へ走る。作りがゆる過ぎたと見えて、ぴかりと、寒いものが一寸ばかり光った。

十三

川舟で久一さんを吉田の停車場まで見送る。舟のなかに坐ったものは、送られる久一さんと、送る老人と、那美さんと、那美さんの兄さんと、荷物の世話をする源兵衛と、それから余である。余は無論御招伴に過ぎん。

御招伴でも呼ばれれば行く。何の意味だか分らなくても行く。非人情の旅に思慮は入らぬ。舟は筏^{イカダ}に縁^{フチ}をつけたように、底^{ヒラ}が平^{ヒラ}たい。老人を中に、余と那美さんが^{トモ}艫^{トモ}、久一さんと、兄さんが、^{ミヨシ}舳^{ミヨシ}に座をとった。 ※^{トモ}艫^{トモ}=船尾 ^{ミヨシ}舳^{ミヨシ}=へさき

源兵衛は荷物と共に独り離れている。

「久一さん、^{イク}軍^{イク}さは好きか嫌いかい」と那美さんが聞く。

「出て見なければ分らんさ。苦しい事もあるだろうが、愉快的な事も出て来るんだろう」

と戦争を知らぬ久一さんが云う。

「いくら苦しくっても、国家のためだから」と老人が云う。

「短刀なんぞ貰うと、ちょっと戦争に出て見たくなりゃしないか」と女がまた妙な事を聞く。久一さんは、

「そうさね」

と軽く首肯う。老人は髯^{ヒゲ}を掀^{カカ}げて笑う。兄さんは知らぬ顔をしている。

「そんな平気な事で、^イ軍さ^ツが出来るか」と女は、委細構わず、白い顔を久一さんの前へ突き出す。久一さんと、兄さんがちょっと眼を見合せた。

「那美さんが軍人になったらさぞ強かろう」兄さんが妹に話しかけた第一の言葉はこれである。語調から察すると、ただの冗談とも見えない。

「わたしが？ わたしが軍人？ わたしが軍人になれりゃとうになっています。今頃は死んでいます。久一さん。御前も死ぬがいい。生きて帰っちゃ外聞がわるい」

「そんな乱暴な事を――まあまあ、めでたく凱旋をして帰って来てくれ。死ぬばかりが国家のためではない。わしもまだ二三年は生きるつもりじゃ。まだ逢^アえる」

老人の言葉の尾を長く手繰^{タグル}と、尻が細くなって、末は涙の糸になる。ただ男だけにそこまではだまを出さない。久一さんは何も云わずに、横を向いて、岸の方を見た。

岸には大きな柳がある。下に小さな舟を繋いで、一人の男がしきりに垂^{イト}綸を見詰めている。一行の舟が、ゆるく波足^{ナミアシ}を引いて、その前を通った時、この男はふと顔をあげて、久一さんと眼を見合せた。眼を見合せた^{フタリ}兩人の間には何らの電気も通わぬ。男は魚の事ばかり考えている。久一さんの頭の中には一尾の鮒^{フナ}も宿^{ヤド}る余地がない。一行の舟は静かに太公望の前を通り越す。

日本橋を通る人の数は、一分に何百か知らぬ。もし橋畔^{キョウハン}に立って、行く人の心に蟠^{ワダカ}まる葛藤を一々に聞き得たならば、浮世は目眩^{メマグル}しくて生きづらかろう。ただ知らぬ人で逢い、知らぬ人でわかれるから結句^{ケツク}日本橋に立って、電車の旗を振る志願者も出て来る。太公望が、久一さんの泣きそうな顔に、何らの説明をも求めなかったのは幸^{サイワイ}である。顧り見ると、安心して浮標^{ウキ}を見詰めている。おおかた日露戦争が済むまで見詰める気だらう。

川幅はあまり広くない。底は浅い。流れはゆるやかである。舷^{フナバタ}に倚^ヨって、水の上を滑って、どこまで行くか、春が尽きて、人が騒いで、鉢合せをしたがるところまで行かねばやまぬ。 ※ 舷^{フナバタ} = 船縁(ふなべり)

腥^{ナマグサ}き一点の血を眉間に印^{イン}したるこの青年は、余ら一行を容赦なく引いて行く。運命の縄はこの青年を遠き、暗き、物凄き北の国まで引くが故に、ある日、ある月、ある年の因果に、この青年と絡みつけられたる吾^{ワレ}らは、その因果の尽くるところまでこの青年に引かれて行かねばならぬ。因果の尽くるとき、彼と吾らの間にふっと音がして、彼一人は否応なしに運命の手元まで手繰^{タグ}り寄せらるる。残る吾らも否応なしに残らねばならぬ。頼んでも、もがいても、引いていて貫う訳には行かぬ。

舟は面白いほどやすらかに流れる。左右の岸には土筆^{ツクシ}でも生えておりそうな。土堤^{ドテ}の上には柳が多く見える。まばらに、低い家がその間から藁屋根^{ワラヤネ}を出し。煤^{スス}けた窓を出し。時によると白い家鴨^{アヒル}を出す。家鴨はががあがあと鳴いて川の中まで出て来る。

柳と柳の間の的^{テキレキ}と光るのは白桃^{シロモモ}らしい。とんかたと機^{ハタ}を織る音が聞える。

※ 的^{テキレキ} = 鮮やかに白く輝く

とんかたんの^{タエマ}絶間から女の^{ウタ}唄が、はああい、いようう——と水の上まで響く。何を唄うのやらいっこう分らぬ。

「先生、わたくしの^エ画をかいて下さいな」と那美さんが注文する。久一さんは兄さんと、しきりに軍隊の話をしている。老人はいつか居眠りをはじめた。

「書いてあげましょう」と写生帖を取り出して、

春風にそら^ド解^{シユス}け繻子の銘は何

と書いて見せる。女は笑いながら、

「こんな^{ヒトフデ}一筆がきでは、いけません。もっと私の^{キショウ}気象の出るように、丁寧にかいて下さい」

「わたしもかきたいのだが。どうも、あなたの顔はそれだけじゃ画にならない」

「御挨拶です事。それじゃ、どうすれば画になるんです」

「なに今でも画に出来ますがね。ただ少し足りないところがある。それが出ないところをかくと、惜しいですよ」

「足りないたって、持って生れた顔だから仕方ありませんわ」

「持って生れた顔はいろいろになるものです」

「自分の勝手にですか」

「ええ」

「女だと思って、人をたんと馬鹿になさい」

「あなたが女だから、そんな馬鹿を云うのですよ」

「それじゃ、あなたの顔をいろいろに見せてちょうだい」

「これほど毎日いろいろになってればたくさんだ」

女は黙って向^{ムコウ}をむく。川縁^{カワベリ}はいつか、水とすれすれに低く着いて、見渡す田のものは、一面のげんげんで埋^{ウズマ}っている。鮮やかな紅の滴^{テキテキ}々が、いつの雨に流されてか、半分溶けた花の海は霞^{カスミ}のなかに果しなく広がって、見上げる半空^{ハンクウ}には崢嶸^{ソウコウ}たる一峰が半腹から微^{ホノ}かに春の雲を吐いている。 ※崢嶸^{ソウコウ}＝高く険しい

「あの山の向うを、あなたは越していらした」と女が白い手を舷^{フナバタ}から外へ出して、夢のような春の山を指す。

「天狗岩はあの辺ですか」

「あの翠^{ミドリ}の濃い下の、紫に見える所がありませんか」

「あの日影の所ですか」

「日影ですかしら。禿げてるんでしょう」

「なあに凹^{クボ}んでるんですよ。禿げていりゃ、もっと茶に見えます」

「そうでしょうか。ともかく、あの裏あたりになるそうです」

「そうすると、七曲^{ナナマガ}りはもう少し左りになりますね」

「七曲りは、向うへ、ずっと外^ソれます。あの山のまた一つ先きの山ですよ」

「なるほどそうだった。しかし見当から云うと、あのうすい雲^{カカ}が懸^{カカ}ってるあたりでしょう」

「ええ、方角^{ヘン}はあの辺です」

居眠をしていた老人は、舷^{コベリ}から、肘を落して、ほいと眼をさます。

「まだ着かんかな」

胸膈^{キョウカク}を前へ出して、右の肘を後ろへ張って、左り手を真直に伸して、ううんと欠伸^ヒをするついでに、弓を攣^ヒく真似をして見せる。女はホホホと笑う。

「どうもこれが癖で、……」

「弓が御好^{オスキ}と見えますね」と余も笑いながら尋ねる。

「若いうちは七分五厘まで引きました。押しは存外今でもたしかです」と左の肩を叩いて見せる。舳^{ヘサキ}では戦争談が^{タケナワ}酣である。

舟はようやく町らしいなかへ這^{ハ イ}入る。腰障子に^{オンサカナ}御肴と書いた居酒屋が見える。古風な繩暖簾^{ナワノレン}が見える。材木の置場が見える。人力車の音さえ時々聞える。乙鳥^{ツバクロ}がちちと腹を返して飛ぶ。家鴨^{アヒル}がががあがあ鳴く。一行は舟を捨てて^{ステーション}停車場に向う。

いよいよ現実世界へ引きずり出された。汽車の見える所を現実世界と云う。汽車ほど二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百と云う人間を同じ箱へ詰めて轟^{ゴウ}と通る。情け容赦はない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へとまってそうして、同様に蒸氣^{ジョウキ}の恩沢^{オンタク}に浴さねばならぬ。人は汽車へ乗ると云う。余は積み込まれると云う。人は汽車で行くと云う。余は運搬されると云う。汽車ほど個性を軽蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏み付けようとする。一人前^{ヒトリマエ}何坪何合かの地面を与えて、この地面のうちでは寝るとも起きるとも勝手にせよと云うのが現今の文明である。同時にこの何坪何合の周囲に鉄柵を設けて、これよりさきへは一步も出てはならぬぞと威嚇^{オド}かすのが現今の文明である。何坪何合のうちで自由^{ホシイママ}を擅にし たものが、この鉄柵外にも自由を擅^{イキオイ}にしたくなるのは自然の勢^{アワレ}である。憐むべき文

明の国民は日夜にこの鉄柵に噛みついて咆哮している。文明は個人に自由を与えて虎のごとく猛からしめたる後、これを檻^{カンセイ}の内に投げ込んで、天下の平和を維持しつつある。この平和は真の平和ではない。 ※檻^{カンセイ} = 落とし穴

動物園の虎が見物人を睨^{ニラ}めて、寝転んでいると同様な平和である。檻の鉄棒が一本でも抜けたら——世はめっちゃめっちゃになる。第二の仏蘭西革命はこの時に起るのである。個人の革命は今すでに日夜に起りつつある。北欧の偉人イブセンはこの革命の起るべき状態についてつぶさにその例証を吾^{ゴジン}人に与えた。余は汽車の猛烈に、見^ミ界なく、すべての人を貨物同様に心得て走る様を見るたびに、客車のうちに閉じ籠められたる個人と、個人の個性に寸毫^{スンゴウ}の注意をだに払わざるこの鉄^{テツ}車とを比較して、——あぶない、あぶない。気をつけねばあぶないと思う。現代の文明はこのあぶないで鼻^ツを衝かれるくらい充満している。おさき真闇^{マックラ}に盲動^{モウドウ}する汽車はあぶない標本の一つである。

停車場^{ステーション}前の茶店に腰を下ろして、蓬餅^{ヨモギモチ}を眺めながら汽車論を考えた。これは写生帖へかく訳にも行かず、人に話す必要もないから、だまって、餅を食いながら茶を飲む。

向うの床几^{ショウギ}には二人かけている。等しく草鞋^{ワラジバ}穿きで、一人は赤毛布^{アカゲット}、一人は千草色^{チクサイロ}の股引^{モモヒキ}の膝頭^{ヒザガシラ}に継布^{ツギ}をあてて、継布のあたった所を手で抑えている。

「やっぱり駄目かね」

「駄目さあ」

「牛のように胃袋が二つあると、いいなあ」

「二つあれば申し分はなえさ、一つが悪くなるや、切つてしまえば済むから」

この田舎者は胃病と見える。彼らは満洲の野に吹く風の臭いも知らぬ。現代文明の弊をも見認めぬ。革命とはいかなるものか、文字さえ聞いた事もあるまい。あるいは自己の胃袋が一つあるか二つあるかそれすら弁じ得んだらう。余は写生帖を出して、二人の姿を描き取った。

じゃらんじゃらんと号鈴が鳴る。切符はすでに買うてある。

「さあ、行きましょ」と那美さんが立つ。

「どうれ」と老人も立つ。一行は揃って改札場を通り抜けて、プラットフォームへ出る。号鈴がしきりに鳴る。

轟と音がして、白く光る鉄路の上を、文明の長蛇が蜿蜒て来る。文明の長蛇は口から黒い煙を吐く。

「いよいよ御別かれか」と老人が云う。

「それでは御機嫌よう」と久一さんが頭を下げる。

「死んで御出で」と那美さんが再び云う。

「荷物は来たかい」と兄さんが聞く。

蛇は吾々の前でとまる。横腹の戸がいくつもあく。人が出たり、這入ったりする。久一さんは乗った。老人も兄さんも、那美さんも、余もそとに立っている。

車輪が一つ廻れば久一さんはすでに吾らが世の人ではない。遠い、遠い世界へ行ってしまう。その世界では煙硝の臭いの中で、人が働いている。そうして赤いものに滑って、むやみに転ぶ。空では大きな音がどんどんどんと云う。これからそう云う所へ行く久一さんは車のなかに立って無言のまま、吾々を眺めている。吾々を山の中から

引き出した久一さんと、引き出された吾々の因果はここで切れる。もうすでに切れかかっている。車の戸と窓があいているだけで、御互^{オタガイ}の顔が見えるだけで、行く人と留まる人の間が六尺ばかり隔っているだけで、因果はもう切れかかっている。

車掌が、ぴしゃりぴしゃりと戸を閉^タてながら、こちらへ走って来る。一つ閉てるごとに、行く人と、送る人の距離はますます遠くなる。やがて久一さんの車室の戸もぴしゃりとした。世界はもう二つに為^ナった。老人は思わず窓側へ寄る。青年は窓から首を出す。

「あぶない。出ますよ」と云う声の下から、未練のない鉄車の音がごੱとごੱとと調子を取って動き出す。窓は一つ一つ、余等^{ワレワレ}の前を通る。

久一さんの顔が小さくなって、最後の三等列車が、余の前を通るとき、窓の中から、また一つ顔が出た。

茶色のはげた中折帽の下から、髯^{ヒゲ}だらけな野武士が名残り^{ナゴ}惜気^{オシゲ}に首を出した。そのとき、那美さんと野武士は思わず顔を見合せた。鉄車はごੱとごੱとと運転する。野武士の顔はすぐ消えた。那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。その茫然のうちには不思議にも今までかつて見た事のない「憐れ^{アワ}」が一面に浮いている。

「それだ！ それだ！ それが出れば画になりますよ」と余は那美さんの肩を叩きながら小声に云った。余が胸中の画面はこの咄嗟^{トッサ}の際に成就したのである。

